

# 最新事情

世の中の変化に対応できる  
職業人の育成を目指す

## 神奈川県立小田原 総合ビジネス高等学校

世の中は、人々の予測をはるかに超える勢いで変化していく。それを押しとどめることは誰にもできないことだ。だとしたら、変化に柔軟に対応していく力を養うことが大切なのではないか。小田原総合ビジネス高等学校はそうした考えから誕生した。神奈川県では初の総合ビジネス科の高校における取り組みを紹介する。



国道1号線沿いに建つ  
小田原総合ビジネス高校



生徒が制作した  
学校案内ポスター

### 3科体制から総合ビジネス科へ チャレンジする高校

東海道の宿場町として古くからにぎわってきた小田原は、首都圏に近い交通の要衝として、また海山の豊富な資源を生かし、商業・観光、工業、農業、水産業など、幅広い産業を振興させてきた。また近年では、京浜通勤者向けの住宅開発も盛んに行われている。小田原市の人口は約20万人。伝統と新しい時代の息吹がともに感じられる街である。

県立小田原総合ビジネス高校は、小田原駅からバスで10分ほど、相模湾にほど近いところに位置する。同校のテニスコートを抜け、西湘バ

イパスをくぐり抜けると、そこには広々とした太平洋が広がっている。

同校は平成20年4月に県立小田原城東高校と県立湯河原高校が統合し、「総合ビジネス科」の高校として新たに創設された。生徒数は全校約720人。すでに第1期生、第2期生を社会に送り出してきた。総合ビジネス科とは、あまり聞き慣れない学科名である。その趣旨について、大嶽真康校長はこう話す。

「就職難と言われる中で、新卒者の早期離職が大きな問題となっています。自分が思っていた仕事と違ったからと、せっかくな就職してもすぐに辞めてしまう。もったいない話です。こうしたミスマッチをなくすため、神奈川県では商業高校の教育制度の見直しが進められてきました。従来の3科体制（商業、国際経済、情報処理）から学科の壁を取り払った総合ビジネス科への移行も、その一環。本校は、その第1号なのです。幸い本校の事例が評価され、県下の商業高校は全て総合ビジネス科へと移行することになりました。キャリア教育の導入、生徒の多様な進路に対応したカリキュラムなど、新たな仕組みを充実させていくために、やるべきことはまだまだあります。その一つ一つを教職員と共によりよい方向へと向けていきたいと考えています」。

今年4月に新校長として赴任した大嶽先生は、歩み始めた総合ビジネス科のさらなる充実に向けて今心を新たにしているようだ。

校長の  
大嶽真康先生



ビジネスマナーを  
担当する  
加藤道子先生



「本校は今も、これまでもチャレンジし続けてきた学校なのです」（大嶽校長）と言うように、同校は時代の流れの中で多くの変遷をたどってきた。そのルーツは大正10年創設の足柄実科高等学校にさかのぼる。地域の女性に高い教育を与えようとして創設された学校だが、地域の商店で働く若者たちに商業教育を与えようとしたもう一つの流れが大きく重なり、運営主体も私立、郡立、市立、県立とさまざまに変わってきた。その変遷過程には地域と共に歩んできた歴史が刻み込まれている。

同校生徒の進路は、進学と就職がほぼ半々である。就職先は地元の産業構造そのままに幅広い。職種も事務、製造、販売、サービスなど多様だ。それに対応し、同学科には流通ビジネス、会計ビジネス、情報ビジネス、国際ビジネス、教養ビジネスの五つの系が設置されている。1年次にビジネスの基礎・基本を学び、2年次以降はそれぞれの進路に合わせて専門分野が学べる仕組みだ。また、3年次には進学、就職どち

らにも対応できるように選択科目が多く用意されている。

## さまざまなケースを通して、 応用力を身に付ける

会計ビジネス系、情報ビジネス系の選択科目に設定されている、課題研究「ビジネスマナー」の授業もその一つだ。同校を訪問した日は、会計ビジネス系クラスの授業が行われていた。この授業は情報演習室でパソコンを活用しながら進められていく。この日のテーマは「訪問のマナー」。指導に当たる加藤道子先生が項目ごとにまず基本知識を解説し、パソコン画面を通して学習内容の要点を確認していく。そこまではいわば基礎編である。続いて、ビジネス実務マナー検定の実問題に取り組み。「実問題は実際の場面を想定して出題されているので、応用力を養うには最適です。例えば訪問のマナーにしても、得意先に一人で訪問する場合と、上司と一緒に訪問する場合で、対応の仕方も変わってきます。また、先方が一人の場合と、二人の場合ではまた違ってきます。こうした微妙な違いについて、言葉で説明されても高校生にはピンときません。それよりも実際の場面に即して考えていったほうが分かりやすいです。繰り返し問題を解くことで、何をどう考えたらよいかに分かってくるようです」。

加藤先生が言うように生徒たちは皆、熱心に問題に取り組んでいる。解答の正解率も高く、なぜそれが適当、もしくは不適当なのか、その理由についてもしっかりと答える生徒がほとんどだ。

その合間には、加藤先生がアレンジしたビジネスマナークイズも出題される。例えばこんなふうだ。「若手社員のビジネススーツとしてふさわしいのは、①自分に似合うダブルのスーツ、②シンプルなシングルのスーツ。さて、正解は？」。生徒は「正解は②です」と楽しそうに答える。「なぜ、②なの？」と加藤先生。生徒は待ってましたという感じで、その理由を述べる。「ダブルスーツを着た新人社員なんておかしいよね」と感想を伝え合う声も聞こえてくる。静かだった教室も、クイズの後は生徒の発言も活発になりぎやかになってきた。クイズ効果



ビジネスマナーの  
授業では、パソコン  
を活用しながら  
ケーススタディ方  
式で学ぶ



ショップ顧問を務める(右から)  
大坪要先生、勅使川原真由美先生、  
吉松啓介先生



地元食品会社と共同開発したお弁当「陸海ちゃん」の包装紙(左)  
生徒が経営する地元銀座通りのチャレンジショップ「GESTORE おだわら」も9年目を迎えた。



「憶せずに発言し、活発に意見を言い合えるような、楽しい授業にしたいと思っています。生徒たちは目立つことを嫌がる傾向があるので、そこを何とかしたいと思います。クイズを入れ込んだり、あれこれ工夫しています。ビジネスマナーを学んでおけば将来必ず役立ちます。それは卒業生の誰もが言っていることですし、私自身の経験からも実感していることです。どんな仕事に就いても人付き合いはついて回りますし、周囲の人とよい人間関係を築くことはとても大切です。この授業を通して、そのことを伝えたいですね。」

加藤先生の願いは、生徒たちにしつかりと届いているようだ。11月には全員がビジネス実務マナー検定3級にチャレンジするが、昨年度は全員合格という輝かしい結果となった。しかも成績優秀により「文部科学大臣賞」まで獲得するという快挙である。

### やってみて考える、 体験を通して社会性を培う

この授業では検定受験の後、もう一つ取り組みがある。実技演習だ。電話応対、応接室への案内、お茶の出し方などをグループワークで行う。生徒たちはこれらの実技に興味はあるが、人前での演技には恥ずかしさが先に立ってしまうという。ここでも楽しさがキーワードになる。

「生徒たちは人前で何かをすることに慣れていないので、まずは楽しみながら覚えようと、『お茶会』と称してみたり、仕掛けをいろいろ工夫しています。そうやって実際に何度もやってみるうちに、だんだんに人に見られることに慣れてきます。できるようになりたいという気持ちほどの生徒も持っていますから、後は頑張ってもらってくれます。」

実技演習を行っていると、「先生、床の間って何ですか？」などどびつくりするような質問が飛び出すという。加藤先生はそんなことも知らないのとあきれられるよりも、だから常識や社会性をもっと身に付けさせたいと逆にファイトが湧いてくるようだ。

総合ビジネス科の大きな目標の一つに、社会性の育成が挙げられる。この目標の達成に向けて、同校では上記の他にもさまざまな取り組みが行われている。2年次に100名以上が参加

して実施されるインターンシップや、必修科目「人間関係構築I」などがある。

中でもユニークなのが、小田原市内の銀座通り商店街に出店しているチャレンジショップ「GESTORE おだわら」だ。この店では全国の高校生が開発・生産している高校ブランドの商品をはじめ、他校や地元食品会社と協力して独自に開発した「陸海ちゃん」「秋恵ちゃん」の2種類の弁当、地元一流ホテルブランドのパンなどを販売している。この店は、部活動として店舗経営同好会が運営に当たっているが、1年生の「ビジネス基礎」の授業の一環として全員が交代で店舗に立つなど、体験学習の場として活用されている。

「実際にお店に立ち、お客さんと接することで身だしなみの大切さや、商品知識の必要性など、気付くことがあると思います」と指導に当たる勅使川原真由美先生。

「商店街に出店していることで、商工会からイベントの誘いを受けたり、地元との付き合いの接点にもなっています。ただ、小田原も中心部の空洞化が進んでおり、客足が減ってきているのが厳しいところですね。お客さまを呼び戻すために何をしたらいいか、商店街の方々と一緒に考えていきたいです」と同じく指導に当たる大坪要先生。

地元の産業界と共に変化、発展してきた同校。変化を乗り越え、新たな道を切り開いていくことだろう。